

# 1851年ロンドン万国博開催と地方産業界

—開催合意形成過程での反応と対応を中心に—

重富 公生

## 1. はじめに

1851年に開催されたロンドン万国博覧会は、史上初の国際規模の博覧会であっただけではなく、およそ一世紀にわたるその後の万国博覧会の性格を規定することになった。すなわち、産業および科学技術の到達点を示すものとしての万国博覧会という性格である。もちろん最初のロンドン万国博では重視されていなかった美術部門が、第二回のロンドン万国博(1862年)以降、とくにパリで開催された数次の万国博において重要な位置をあたえられることになったが、上記の基本的性格はほぼ二十世紀なかばにいたるまで変わらなかったといつてよい。第二次世界大戦および「高度成長」期の後、とくに近年にいたって万国博のコンセプトがしだいに環境の保護や自然との共生を重視する方向に向かっていったことは承知のとおりである。そして産業技術の精華としての万国博覧会は、1862年以降今日にいたるまでイギリスでは開催されていない(万国博自体は1924から25年にかけてもう一度開催されているが、これはロンドン・オリンピックを記念して開催された「大英博覧会」であり、英国連邦の結束力を誇示するという性格の優れた催しであった)。

最初の国際規模の産業博覧会がイギリスで開催されたことは、産業革命の母国としてごく当然でもあるが、産業博覧会の経験や実績という点では、フランスこそが最初の催しの栄誉を担う資格を有していたとみることもできる。なぜフランスがそれを実現しえなかったかについてはここでは論じないが、フランスでも開催の機運が高まっていたことは事実である。にもかかわらず、実際の開催に至るほどの推進力や熱意が欠如しており、さらにそれに反対し阻止する力が働いたのであった。本稿は、最初の万国博となった第一回ロンドン博開催にあたっての国内合意形成作業やそれをめぐる地方の産業界の反応を取り上げるものである。もちろん結果的には、この万国博はイギリス産業の技術的優位を世界に誇示した点でも、また催しとして巨額の黒字を計上した点でも大成功であった。未調査ではあるが、おそらくほぼ十年後の第二回ロンドン万国博の開催にあたっては、国内の各業界の協力取り付け作業ははるかにスムーズに進んだことであろう(この万国博は赤字を計上し、催しとしては第一回の成功にはとうてい及ばなかった)。しかし、今日このような規模の催しを実行する場合の準備作業のスケジュールなどからは想像もできないが、1851年のロンドン万国博の場合、丸一年前になっても会場の建物のプランもほとんど白紙の状態で、その場所さえも正式決定

されていなかった。地方ないし国内規模の博覧会の経験は少なくなかったとはいえ、国際博ともなれば多くの作業を手探りと試行錯誤で進めざるを得なかった。出品の担い手であり、万国博の開催によって大きな利益を得ると見られるはずの産業界の反応も決して一枚岩ではなく、万国博の主催者は開会ぎりぎりの時期まで国内各方面・各地域の合意形成作業を行うことを余儀なくされたのである。本稿では、1851年ロンドン万国博王立委員会所蔵の同委員会合議事録および書簡・報告書類、そして1851年万国博の公式カタログを主要な依拠資料として、国内各地域・各産業界の万国博への反応および開催関係者による合意形成作業を見ていきたい。

## 2. 工芸振興協会 (Society of Arts) による準備活動

1849年8月1日付で、アルバート公の秘書をつとめていたColonel Phippsから以下の通告が下されている。

工芸振興協会会長たるアルバート皇太子殿下は、コール (Henry Cole)、フラー (Francis Fuller)、ラッセル (John Scott Russell) 三氏<sup>1)</sup>に、殿下が議会にその調査報告結果を提出する目的のために、国内工業諸地域を巡回し、来たる1851年開催の万国産業博覧会についての主要製造業者たちの意見やその他の情報を収集する権限を与える<sup>2)</sup>。

工芸振興協会(以下、協会)とは正式名をthe Society for the Encouragement of Arts, Manufactures and Commerceと称し(通称the Society of Arts)、1754年に創設された団体である。1760年代には会員数は2000名を超え、当時の国内で最大規模の団体となっていた<sup>3)</sup>。そして1851年のロンドン万国博の開催にあたっては、後述する王立委員会と密接な連携を保ちながらそれを大成功に導き、内外の名声を確立した。とくに王立委員会が結成される1850年1月までは、開催のための準備作業はもっぱら協会が担い手となるかたちで行なわれた。本節ではその準備作業の経緯を観察する。

設立当初、協会は国益に貢献したさまざまな分野の発明や企業を表彰することを目的としていた。また協会はすでに1760年に現代美術博覧会を開催していたが、ほどなくRoyal Academyが設立され、この分野の活動を担うことになった。さらに1838年には王立農業協

---

1) 本稿では人名の表記にあたり、コールらの頻出する人名についてはカナ表記(初出箇所のみ括弧内にアルファベット表記)、そうでない人名についてはそのままアルファベットで記した。

2) WC/18.

3) 大野(2009)、107頁。

会が設立され、農業部門での改良を促進する主体となった。そのような経緯もあり工芸振興協会はその活動分野の主力を、従来の発明への褒賞から、技術促進・普及のための講演会開催、専門誌の発行、最新の工業製品の展覧会開催等に移していったのである<sup>4)</sup>。ロンドン万国博時の協会の会長はアルバート公であったが、彼はDuke of Sussexの後を継いで1843年に会長に就任している。サセックス公爵は在任中から組織の運営を近代化するために有能な人材をリクルートしていた。そのなかには、のちの二度のロンドン万国博やサウス・ケンジントンの発展に貢献することになる人物も含まれていた。C. H. Dilke, R. Redgrave, R. Stephenson, J. Paxton, W. Fairbairn, そしてプレイフェア (L. Playfair) といった顔ぶれである<sup>5)</sup>。その後さらにコール、ラッセル、フラー、ワイアット (Matthew Digby Wyatt), Thomas Cubitt といったロンドン万国博の主役級の担い手たちが協会の活動に参加することにより、万国博開催準備に向けた態勢が整ってゆく<sup>6)</sup>。

1847年にはコールとスコットが出品依頼した工業展示品を含む博覧会が協会の大ホールで開催されたが、二万人以上の見物客が訪れ、定期的博覧会開催のはずみとなった。協会は、政府要人のHenry LabouchereやLord Seyourにも接近してゆく。協会の1848年および1849年の博覧会も尻上がりの成果をおさめ、来たる1851年に計画された国家的博覧会への自信を深めていった<sup>7)</sup>。1849年の6月30日にバッキンガム宮殿でコール、フラー、ラッセルらが一堂に集って会合がもたれた。これは万国博計画の進展にあたり重要な会合であり、この会合で展示品の分類方法や開催場所、必要経費や資金の調達方法、国際規模での開催などが話し合われた。また運営にあたりアルバート公を中心とする王立委員会の創設がもっとも適切な方法であること、協会は多額の資金を寄附によってまかない、それを募る仕事を担当することが合意された<sup>8)</sup>。協会は所与の業務を遂行するために、コール、フラー、土木技師John Farey, George Drewらを中心とするExecutive Committee (後に王立委員会傘下に設立された同名の委員会とは異なる) を立ち上げ、そのメンバーは全国工業都市の意向を確認するために、国内行脚に出かけることとなった。

協会メンバーによる実際の全国歴訪は、事実上この会合に先立って4月の末から始まっていた<sup>9)</sup>。この旅は数ヶ月に及んだが、万国博の周知とそれに向けた各地の合意形成にあたり大きな成果をおさめた。コールは9月1日付のアルバート公あての手紙で、「私はフラー氏やワイアット氏とともに、1851年万国博について各地の大手の製造業者の意向を尋ね、たい

4) Hobhouse (2002), pp.1-2.

5) Hobhouse (2002), pp.2-3.

6) 草光俊雄によれば、協会の活動は19世紀なかばにコールらが評議会に参加するまでは、ほとんどの製造業者に対して見るべきほどの影響を与えなかったとされている。Kusamitsu (1980), p.86.

7) Hobhouse (2002), pp.6-7.

8) Hobhouse (2002), pp.7-9.

9) 経路および主要歴訪地については拙稿(2005), 70頁参照。

へん満足すべき結果を得ておりまして、月曜の朝にバルモラル宮にて報告できますことは幸いです」<sup>10)</sup>と伝えている。この歴訪の一連の成果については、10月にコールとフラーからアルバート公に提出された報告書にまとめられた。まず訪問にあたり、各地(各都市)の周知と合意を得るためにもっとも効果的であった手順について、以下のように述べられている。

各地域を訪問するにあたり、私どもは当初少数の高位の人や企業を個別に尋ねる方針をとり、スタッフォードシャーの陶磁業界、シェフィールド、ブラッドフォードでは実際そのようにいたしました。しかしマンチェスターでは私どもの訪問は大いなる敬意をもって迎えられ、大企業の役員連だけでなく多くの企業が会合をもってくれました。また対象も生産に直接関係した業者に限定しようと考えていましたが、同市に着くや必ずしもそれが賢明な方法でないことを認識しました。多くの人は、この訪問を一刻も早く市長や市のお歴々に知らせる必要のある関係者に紹介してもらおうのが望ましいとの意見でした。私どもはそれに従い、市長の紹介によりもっとも重要な人たちに会うことができ、市長は再訪にあたり市として援助をおこなうことも確約しました。どうやらこの訪問は地方紙でも予告されていたようです。私どもの訪問が、早い時期からその意図を超えて公然たる性格を帯びざるを得ないこともあるようです。マンチェスターを発ったあと、私どもは原則として各都市の行政の長に面会して、主要な製造業者や影響力のある人たちに会えるよう便宜を図ってもらうことにしました。すべてのケースでこれはうまく行き、段取りもスムーズに進行するようになりました。とくにダブリンでは市長閣下の呼びかけにより、なかば公的性格を有する大規模な集會が開かれました<sup>11)</sup>。

またこの報告書では、全国各地の主要な関係者の大方の合意事項として、このような大博覧会の開催にあたっては期待度が極めて高いこと、博覧会の規模は国際的なものであるべきこと、博覧会は国費ではなく民間の自発的醸金によって開催・運営されるべきことが記されている。ただし、出品の意向はあるか、出品者を褒賞すべきかどうか、といった質問項目については、かならずしも意見の一致をみていない<sup>12)</sup>。報告書では、ほかに各関係者からのさまざまな意向や要望が併記されている。協会は設立当初から、工業製品のデザイン改善の促進を大きな目標のひとつとしていた。報告書でも、デザイン学校校長であったR. Redgraveから、次のような希望が出されている。「来たる博覧会は、製造業者とデザイナーの両方に多大な便益をあたえることは疑いない。伝統的なスキルにより作り上げられた工芸品の出品

---

10) WC/I/22.

11) WC/I/37, pp.2-3.

12) 詳細は、重富(2005)。

は、最新の方法で生産する製造業者たちにも良い刺激となろう。両方を展示することで新旧双方についての情報が提供される。』<sup>13)</sup>しかしその一方で、中世の工芸品の出品もなされるべきだが、それらは翌年の協会の展覧会で出品されるのがふさわしいのではないか、という意見もあった。ここには、工業製品のメリットを質と量(ないし安さ)のどちらに重点を置いて評価するかをめぐる論争の萌芽がみられる。

このバルモラルでの謁見・奏上のあと、コールらはふたたびアイルランドを含む国内各地を歴訪している。11月14日には追加の報告書がアルバート公に提出されているが、やはり各地で万国博の計画に対する好意的な反応と賛意で迎えられたこと、いずれも歴訪にあたり周到な準備が整えられており、場所によっては数百名の会合を持ってくれたことなどが記されている<sup>14)</sup>。

このように工芸振興協会が担い手となった万国博準備作業の第一段階は、具体的な寄附や展示の依頼よりは各都市・地域の総論的な意向の聴取が中心であり、来訪した協会のメンバーはおおかたどこでも好意的態度で迎えられた。その意味では、この段階はむしろ本格的準備作業のための合意形成のプロセスであったと言えよう。

### 3. 王立委員会の結成

このように、1849年までは、それまでの内国博主催の実績やメンバーの専門的知識を生かすかたちで、もっぱら協会が万国博の準備作業にあたってきた。しかし国際規模の大博覧会開催に当たり、たとえアルバート公を会長に戴くとはいえ一民間団体にすぎない協会の活動にのみ依拠することはできなかつた。博覧会の開催および運営一切を統括する公的組織の必要性は早くから意識されており、それに向けた準備もすすんでいた。1849年の1月にコールは、フランスのモデルにあやかって、協会員だけでなく、商業界や科学分野、美術分野からの代表を加え、国家的・公的な性格を有する委員会の創設をアルバート公に上奏していた。この年の10月、製造業者やシティーの博覧会支持の態度がある程度明確になった段階で、コール、ラッセル、フラワーはこの件を検討する目的でウィンザーにアルバート公を訪ねた。その場でアルバート公は、想定される委員会には政府および協会それぞれから書記長(secretary)を加えること、そして上院でもっとも強硬な反自由貿易派として知られていた農業協会会長リッチモンド公爵を加えることを提案した。後者の提案は、できるかぎり多様な階層と利害を委員会に取り込もうという意図でなされたものであるが、結果的にはリッチモンド公爵の加入は実現しなかつた。一方、商工委員会議長のH. Labouchereは製造業者た

13) WC/1/37, p.9.

14) WC/1/63.

ちの高い支持に鑑み委員のなかで彼らの存在感を強めようとしていたが、この時点ではアルバート公はそれには慎重な姿勢だった<sup>15)</sup>。

けっきょく委員会には幅広く各界から利害を代表するメンバーを集めるという原則が重視され、従来の協会の評議会メンバーと同席することになった。アルバート公が委員長に就任し、政府筋から商工委員会議長の個人秘書をつとめていたStafford Northcote、協会からラッセルが予定通り委員会の書記長として参加した。これにより、今や政府が博覧会に関与するかたちで、財政的な責務を負うこと無く、この計画にたいして外国勢の参加にあたり要求される権威をあたえることを意味した。さらに委員会が協会を指導することで「利権漁り」の猜疑から逃れ、またアルバートを責任者とすることで王室との連携を保ったのである<sup>16)</sup>。

王立委員会の下には委員会が統括するいくつかの専門委員会が設置された。財務委員会、建設委員会、メダル委員会などがそれぞれの分野の業務を差配することになったが、なかでも執行委員会(Executive Committee)は、活動全体の推進役を果たす重要な組織であった。この委員会には協会以来のメンバーであったコール、フラー、ワイアットの他にColonel Reid(委員長)、Charles Wentworth、George Drewが加わった。こうして王立委員会が主導権を握ることにより、本格的に全国規模での万国博支持の合意形成や準備活動が動き出すことになったのである。最初に取り組むべき課題は全国的な地方委員会のネットワークを立ち上げることであった。王立委員会の最初の会合(meeting)は1850年1月11日に開催されたが、その後万国博開幕までは月平均2.5回のペースで開催されている(ちなみにこの王立委員会は今日なお存続しており、会合も継続的に開催されている)。その第一回および第二回会合(1月18日)の資料として「地方委員会(Local Committees)結成についての執行委員会報告」が添付されており、次のような勧告が行われている。

[...]執行委員会は王立委員会に次のような勧告を行いたい。すなわち、全王国が博覧会の複合的な目的と意図を理解し、博覧会に期待を高めるよう十分に教化されること、およびこの目的を達するにあたり地方委員会が担い手を務めるべきこと。

寄附金の計画的徴募は重要である。産業活動における精神の発展と製品の改良はさらに重要である。しかし博覧会から引き出される教訓に膨大な人民大衆を与らせることこそもっとも重要である。したがって執行委員会は地方委員会の主要な機能として、以下のことを勧告するものである。1. その利益が大きくまた重要な場合はLocal Commissionerを推挙すること。2. 寄附金の組織的徴募。3. 博覧会の展示品として適切な製品を推奨すること。4. 当該地域からの博覧会見物を促進し、しかるべき時期にはそのための援助方策を講

15) Davis(1999), pp.46-47.

16) Davis(1999), p.48.

じること。

人口の多い地域の地方委員会はこれらすべての機能を果たすことが望ましい。もちろん、おそらく多くの地域ではLocal Commissionerの推挙までは手が回らないだろうし、必要でもない。しかしすべての地方委員会は、博覧会の展示品を提供し寄付金を募り、開会後は博覧会见物の手だてを整えるにあたり尽力することが望ましい。連合王国内で行政法人格の都市と選挙区となっている都市は約400を数える。王立委員会の決定や地方委員会結成勧告の文言を記す内容で、すでに回覧文が市長のみならず、主席ベイリッフや選挙管理官(ただしフィンベリー、ランベス、ウェストミンスター等の場合)に送付されている。

[...]さらに執行委員会は上記の諸都市のほか、地方委員会結成の勧告を人口3000人以上の町にすべからく送付することがまず必要と考える。もしこの勧告が首尾良く受け入れられれば、1200以上の地方委員会が結成されると推定する。しかしこの規模で働きかけを行なっても、多くの市場町や重要な工業都市のいくつかは漏れてしまう。[...]王立委員会で基準を決定するか、あるいは執行委員会が事情を勘案しながら決定すべきか指示されたい。[...]<sup>17)</sup>

このように、万国博協力取り付けにあたり特に重要な都市・地域にはLocal Commissionerを任命して活動にあたらせることと、地方委員会結成にあたって勧告を行うべき都市の範囲について諮られている。ところが1850年1月末に執行委員会がまとめた報告書によると、都合350の地方委員会結成勧告書のうちわずか4通のみが受け入れられ、25通が拒否、残りが返答なしという状況であることが判明し、王立委員会はおおいに狼狽させられることになる。1月24日の第三回会合で提出された「執行委員会第三次報告書」から少しく引用してみたい。

[...]地方委員会結成勧告への回答は不十分で、執行委員会は地方委員会勧告受け入れ状況を示す追加レポートを提出できるまでには至っていない。別途付録[省略]に1月23日までの結果を記しておいた。本委員会は、王立委員会がこの問題の解決にあたり、想定していた目的を達成するために、たんに回覧状だけでは不十分ではないかと危惧する。最初に博覧会の開催が提案され、公衆にはこの催しについての知識がほとんど行き渡っていなかった時には、地方委員会形成の説明はどこでも受け入れられたのに、今この提案がその最大の利点とともに説明されるに至るや、市民たちは公式の回覧状をまるで受け入れる気がないようだ。執行委員会は、以前に可能であったことを今成し遂げるためには人員の派

17) 8A/I, Jan.11<sup>th</sup>&18<sup>th</sup>.

遣が必要なこと、疑いないと考える。そしてこれまでの経験からすれば、王立委員会の決定が想定していたような頻度で地方委員会が結成されるにあたっては、一件あたり最大3ポンド10シリングの人員派遣手当が必要であるという意見である。執行委員会は、この支出が寄附金によりまかなえない場所はほとんどないと進言する。

執行委員会は地方委員会結成にあたってのためらいが存在すること、そして博覧会に対する十分な知識と興味の不足のみに原因があることを認めており、地方委員会が結成された場所以外には公式寄附金募集の勧告を送付することを控えてきた。地方委員会結成をためらっている場所は、現時点で寄附の話しを持ち出したら、その躊躇が積極的な反対に転じる可能性がある。[…]<sup>18)</sup>

たしかに前年にコールらが協会のメンバーとして主要工業都市を歴訪してそれなりの成果を上げていたが、前述のようにこの時点ではどちらかといえば総論的な説明と意見聴取に重点が置かれていた。王立委員会が結成され、いよいよ具体的段取りを詰めていく作業に入ると、委員会は合意形成にあたりさまざまな困難や試練と遭遇することになった。次節で詳細に観察するが、とにかくこの段階では、地方委員会が万国博への寄附目的のための団体と思われ込まれていたこと、製造業者の意向がかならずしも十分考慮されていないという認識があったこと、そしてなによりもまだまだ万国博の全般的主旨が理解されていなかったことが報告書でも指摘されている。このような事態を打開するために、委員会は二つの新しい小委員会を結成した。すなわち、委員会の計画を周知徹底させ各地の地方委員会を立ち上げる任を負う Subscriptions Committee、そして全国各地からの問い合わせに対応し王立委員会に意思決定のための情報を提供する Correspondence Committeeで、後者はコールと C. H. Dilke がメンバーとなった<sup>19)</sup>。

#### 4. 王立委員会による準備活動と各都市の対応

このあと数ヶ月にわたり、このふたつの委員会のメンバーを中心によりいっそう精神的な全国遊説活動が展開されるが、ここからは王立委員会に保存されている各委員からの手紙や報告書を中心にその進行状況を追跡してゆこう。とくに3月までの短期間に彼らは約200の都市を来訪したが、この時期については残念ながら残存資料はきわめて少ない<sup>20)</sup>。

18) 8A/I, Jan.24<sup>th</sup>.

19) Davis(1999), p.59.

20) デイヴィスはこの時期に北部イングランドから送られた手紙を引用しているが、どういうわけか史料番号を示す脚注がつけられておらず、史料を特定できない。それによれば、この地域の諸都市ではともかくにも始まっておらず、いちから活動をはじめなければならない。最初のうちは冷淡な反応を示す



王立委員会による第二段階の準備作業では、寄附金の徴募と展示品の出品依頼を軸とするより具体的な内容を各地で調整・協議する仕事を中心になる。各都市や地域の万国博開催への態度は、ごく単純に分類すれば、早い段階から積極的・協調的な雰囲気が強かった場合があり、また対照的に消極的・無関心・冷淡な態度や拒否反応を示した場合もあった。しかしより典型的であったのは、最初のうちはそのどちらともつかないやや懐疑的な雰囲気、委員の啓蒙・情宣活動等の結果、しだいに万国博に協力的な方向に変化するというケースであった。もちろんいずれの場合も都市・地域内で業種・階層ごとに利害や意見の違い・対立がみられたし、消極・反対派のケースでは、委員の説得によっても最後まで協力的態度がえられなかったこともあった。

協力的事例の最右翼としてしばしばあげられるのはマンチェスター市であるが、同市についてはアウアバックらがその背景や経緯を詳細に論じている。ごく簡単に要約すると、マンチェスターには最初の国際的規模の博覧会を受け入れかつ積極的に協力してゆくための道具立てが揃っていた。すなわち同市は19世紀なかばまでには綿工業を中心としながらも各種商工業が繁栄をきわめていたばかりでなく周辺の商工業ネットワークの結節的存在であったこと、たんにそのような“metropolis of manufacture”にとどまらず、いわば世界の自由貿易の一大中心地でもあったこと、すでに国内規模の博覧会の伝統もあり文化的行事に対する関心と支持も強かったこと、そしてより具体的には、たとえば、すでに同市で教育普及活動や労働者階級改善活動、科学の振興などで実績をあげていた中産階級のユニテリアン派が万国博に向けても地域の組織化に積極的に協力したことがあげられよう。工芸振興協会からの打診に応えるかたちで、すでに1849年の11月には参加者200名を数えるおおがかりな集会が開かれている。この集会ではコールによってプランの概要が説明されたが、市長のJohn Potterやマンチェスター主教、John Brightといった著名人がそれぞれの立場から万国博開催の多面的な意義について演説をおこなった。周辺のボールトン、ソールフォード(Salford)、オールダム(Oldham)といった都市からも参加者があり、多くの参加者がのちに寄附や展示品の出品、地域の組織責任者などのかたちでプランに協力することになったという<sup>21)</sup>。

綿工業の中心であったマンチェスターだけでなく、それと並ぶ基幹産業のひとつであった毛織物工業エリアでも万国博の開催については前向きな意向が強かった。ヨークシャーのブラッドフォード、リーズ、ハダスフィールド、ハリファックスが毛織物工業の四大セン

---

も、説明することによりそれなりの理解を得られるケースも多く、話しを聞いてもらうだけでも成果といえる。それにしても、すべてを一人でこなすのは並大抵の仕事ではない。Davis (1999), pp.59-60.

21) Auerbach (1999), pp.75-77; マンチェスターは翌50年8月1日付の市民集会の決議として、未だに最終決定していなかった開催場所について、王立委員会のハイド・パーク案を支持し、「国威を発揚させ全世界の人民の交誼を促進する催しに公のスペースのわずかな一角をあてることに対して、それを阻止しようとする動きがあることは、なんとも驚くばかりだ」と表明している。WC/IV/103.

ターだったが、50年3月11日付のハダスフィールド市地方委員会からワイアット宛の手紙で、当市は1851年万国博にたいしては協力的の方針であること、過日デザイナーや職人も含む会合がもたれ、その目的も周知されたこと、また寄附も500ポンドに達しており、すでに市を地域区分してそれを促進していることが報告されている。そして参考意見として、ある大規模業者から地方委員会に届いた、積極的寄附と出品の意志を明言した手紙が同封されている<sup>22)</sup>。ブラッドフォードとリーズについてもやはりアウアバックが指摘しているように、総じて協力的な態度であったが、両市には微妙な温度差があり、いっそう熱心だったのはブラッドフォードであった。それはとくに安手の梳毛製品(worsted)生産の中心がこの時期リーズからブラッドフォードに移りつつあったこと、毛織物企業家を中核とする賢固な中産階級が影響力を保っていたことによる。一方リーズは18世紀には紡毛(woolen)および梳毛工業のメッカであったが、毛織物工業や人口の伸びの勢いが劣り、またこの地域における多様な産業と商業の中心地でもあったので、利害関係もより複雑であった<sup>23)</sup>。

5月といえば翌年の万国博開催まであと一年という時期となるが、これ以降も委員による全国各地の歴訪は引き続き必要な状況であった。月末にロイドはレース編産業の中心地であったノッティンガムを訪れ、市をあげて博覧会に協力する姿勢が溢れていると報告している<sup>24)</sup>。翌月にはプレイフェアが北部のサンダーランド市とダーラム市を訪問して、以下のよ  
うな報告記をしるしている。

サンダーランド(Sunderland)では見通しは明るく、地方委員会もしっかり機能している。私が来訪したことにより、とかくの誤解も解消しつつあるようだ。10人中9人は博覧会に好意的であるが、1人は懐疑的。反対の理由としては、保護主義的理念と、航海法についての政府への反感があるようだ。この地の製造業としては、せいぜいガラスと造船業が存在するぐらいだ。ガラス業者は十分な寄附を約束してくれたし、造船業者については、原料の加工から最終製品に至るまでの展示が期待できる。そのほかにも各方面に手配を行っており、望み通りの結果となろう。

ダーラムでは唯一カーペット製造業があるだけだが、その製品は我が国でも最上の品であり、展示品としてもふさわしい。先日北部および西部イングランドの同業者の会合が開かれたが、博覧会の効用について肯定的な意見であり、あらん限りの支持の方針が表明された。またダーラムの主席司祭(Dean of Durham)はもっとも熱心な支持者であり、個人的

22) Armitage Bridge Millsからの3月8日付の手紙で、同社の職長(overlooker)や労働者たちは、1851年博覧会の趣旨に賛同して進んで寄附を醸出してくれており、来るべき展示の際には、彼らは何を置いても競争者に伍して協力してくれるものと信じているとの主旨。CP/1850/no.49.

23) Auerbach(1999), pp.78-79.

24) WC/III/101.

に多額の寄附をしてくれた。職人層の反応も申し分なく、ロンドンへ行くために積立てている。これに比べるとサンダーランドの職人層の熱意は落ちるが、地方委員会に博覧会の趣旨についてよく浸透させるように働きかけておいた<sup>25)</sup>。

サンダーランドは当時全国有数の港湾・造船都市であり、陶器やガラス製造業者も擁していた。「航海法についての政府への反感」とは、いうまでもなく前年6月の航海条例の廃止のことであるが、造船業の町として、このような政策に対する反感や保護主義的理念が存在し、一定の反対意見もきかれたことは頷ける。この都市は委員の積極的働きかけが成果をあげている事例だろう。ダーラムは、州としては炭坑業のかたわら総じて農業が中心であり、のちにみるように農業関係者は万国博開催に対して消極的ないし反対の態度を示すことが多かった。委員もそれは十分認識しており、コールは州をあげての協力は期待できないので、都市部を中心に働きかけるべきと考えていた<sup>26)</sup>。続いてプレイフェアはスタッフォードシャーを中心とする陶磁器生産地域を訪問したが、総じてこの地の反応は良好であること、寄附も十分見込めることを伝えている。そして、この地域の製品は趣味も仕上がりも洗練されているが、ものによってはテイストに問題がある。ただしミントン (Minton) 社の製品は見たところ素晴らしいようだ。彼のところもやはり外国人のデザイナーを抱えているようだが、これは国内でデザインの教育が不徹底な以上仕方ないだろう。しかしいずれにしても、この地域は展覧会に、我が国の誇りとなるような素晴らしい展示品を出品してくれることだろう、と付記している<sup>27)</sup>。さらに彼は翌7月には炭坑業および石炭積出を中心に製鉄・機械・造船業がさかんだった北部のニューカッスル・アポン・タインに足を伸ばし、地方委員会メンバーと製造業者を中心に準備作業は順調に進んでいること、炭坑の採掘坑の模型の出典が準備中であることを報告し、この市は万国博の原材料部門の重要な担い手となるはずであると期待している<sup>28)</sup>。

一方、石炭や工業原料の提供という立場が明確であったコーンウォールでも出品に向けて着々と準備が進められており、すでに秋も深まった頃にプレイフェアが状況を報告している。すなわち、コーンウォールでは地方委員会も任務を把握し活動しつつあり、とくに原材料部門が熱心であること。機械業者はすくなくとも三つの最高性能のコーンウォール製エンジン (Cornish engine) の出品を準備している。ただし鉱山用機械はモデル作成の費用が不足しているし、重要業種の鉱山業関係も欠品、再先端の技術を誇るアルバート公所有の鉱山のミ

25) WC/IV/52.

26) Auerbach(1999), p.82.

27) WC/IV/1.

28) WC/IV/59.

ニチュア・モデル作成については、各方面から費用の醸出が見込めそうだが、あと少し足りない。いずれにしても総体的にここではうまく行っているという<sup>29)</sup>。

次に、上記の諸都市・諸地域とは対照的に万国博の開催に対して消極的ないし反対の雰囲気が強かった事例に目を向けてみよう。一般的な傾向として従来指摘されてきたことは、保護主義者、トーリー派関係者、そして農業関係者は反対の態度を示す傾向があったという事実である<sup>30)</sup>。またこの時点では特許法を中心とする知的所有権保証の枠組みの整備が万全とはいえず、国際規模の博覧会の開催によってイギリス製品の技術や意匠が剽窃 (piracy) されるのではないかと懸念も根強いものがあった<sup>31)</sup>。

基軸産業の中心地を持たなかったケントもどちらかといえば消極的な雰囲気が優勢だったことを、ロイド (Colonel Lloyd) のレポートが伝えている。たとえばメイドストーン (Maidstone) とその周辺では、農業関係者ならびに保護主義者だというだけで反対者が多い。ジェントリーや貴族層が範を垂れ、商工業者もそれに従っている。王立委員会のちょっとした骨折りでこのような状態も和らぐのではないかと思うが、もし手を打たないと、博覧会にとって容易ならざる状況が出来る恐れがある、と。カンタベリーやロチェスターやチェタム (Chatham) でもほぼ同じ状況であった。ただし、宗教都市でもあるカンタベリーでは司祭長らに接触し万国博の目的について丁寧に説明したところ、会合への出席と協力を約束してくれた。総じて、牧師層に博覧会の真の目的についての情報が行き渡れば、彼らと教区民の協力が得られる見込みは大きいと報告している。またケントはホップ栽培等の農業州でもあったが、一方で歴史的名勝も擁し観光地であったのみならず、大陸との交通の要衝でもあった。ドーヴァーは当初不熱心で寄附も進んでいなかったが、外国人やお金の流入の見込みを聞き及んで協力的な雰囲気になっていったという<sup>32)</sup>。

一方ランカシャーは、中心地であるマンチェスター周辺の諸都市でも広範な綿工業の展開が見られたエリアであった。ロイドは7月にこの地域についてのレポートを送付しているが、必ずしも各市が一丸となって積極的に万国博を支持していたわけではなかった。ストックポートやボルトン、ブラックバーンは総体的に前向きな態度であったが、ウィーガン (Wigan) やベリー (Bury)、オールダムでは綿紡績業関係者は熱心であるもののそれ以外は無関心で、寄附も進んでいない状況だった。とくにオールダムの場合、プラット (Platt) 社が綿製造工程の機械一式を会場で実動させる大仕掛けな展示で万国博会場の話題をさらうこ

29) WC/IV/141.

30) Auerbach(1999), p.77.

31) "Song of the Pirates Preparing for the Exhibition of 1851"と題する歌まで出来ていたという。Leapman (2001), p.81.

32) WC/IV/53. 日付はない。

となるが、逆にそれ以外の業者との温度差が際立っていたようである<sup>33)</sup>。またプレストンやストックポートでは、剽窃から保護するための法的枠組が整っていないので、出品予定者や発明家は博覧会に出品することを躊躇しているとも報告されている<sup>34)</sup>。ちなみにブラックバーン市は前述のように、どちらかといえば好意的な雰囲気であったが、*Blackburn Standard*紙は9月11日付紙面の万国博にたいする意見表明のなかで、ヨーロッパ諸国を中心に大勢の外国人が渡英することによる治安面や警備体制の不安をあげ、彼らの渡来により大陸の1848年の騒擾がイギリスに持ち込まれる危険性を指摘している<sup>35)</sup>。これも一般に反対の理由として根強いものがあつた。

さらに何らかの突発的事情や椿事ともいべき事態のために、委員の合意形成活動が阻害されることも少なくなかつた。ロイドの報告によれば、コヴェントリではWarrenなる人物が、労働者階級に広く呼びかけて、大規模な集会を開こうとしている。職工たちは、彼を王立委員会のメンバーだと思っているようで、本来の地方委員会とは別に議長を選出し委員会を組織しようとしている。市長や本来の委員たちは多いに困惑しているが、私は大変な誤解であることを伝えた。職工・職人たちは、どうやら自分たちの意見が万国博に反映されないことを危惧し、Warrenはそのような状況を利用して影響力を拡大しているようだ。私は有力者たちに、そうではないことを強調した。状況は総じて改善しつつあるが、このようなことが起こる可能性は存在する、と<sup>36)</sup>。

万国博の理念や主旨についてまだ一般によく理解されていなかった段階においては、明確な賛意や反意のどちらともいえない態度、あるいは戸惑いを示す都市が多かつたことは当然であろう。それらの都市や地域について委員たちは熱心に趣旨説明や広報活動を行い、次第に支持を広げていった。万国博にたいする態度におけるこのような“conversion”の典型としてしばしば言及されるのは、リヴァープール市の事例であろう。1850年の5月にプレイフェアが訪問した時には、非工業都市としてどちらかといえば反感と不熱心な雰囲気に迎えられた。しかし彼は万国博の熱心な支持者であつた*Liverpool Mercury*紙主筆に働きかけ、同紙が「万国博は生産者だけでなく商人や流通業者にとっても有益」という論陣を張ることにより、次第に市民の偏見や不安を払拭していったのである<sup>37)</sup>。

各種金属製品生産の中心地であつたシェフィールドでも2月の段階では、王立委員会が万国博にあたり同市に何を期待しているのか十分な情報が伝わっていなかつた<sup>38)</sup>。その後5月

33) WC/IV/89.

34) WC/IV/12.

35) WC/IV/33.

36) WC/III/101.

37) Auerbach(1999), pp.79-80.

38) 拙稿(2003), 8頁; CP/1850/no.5.

になってもブレイフェアはこう報告している。シェフィールドでは博覧会の趣旨についてまったく理解されていない。大手刃物業者のロジャーズ&サンズ (Rogers & Sons) は、1平方ヤードの展示スペースを要求してきたが、まっとうな工業製品をわれわれが望んでいるとははなから思っておらず、千枚もの刃を備えたナイフなど珍奇なものの出品を想定している。その後要求スペースもふやし、大きな展示品を送りたいという意向だ。またこの地域最大の業者は30フィートのスペースを要求している。その後400平方フィートにまで要求が拡大したが、シェフィールドへの割当分を説明せねばならなかった、と。ただし、博覧会への市民の支持は全員一致からはほど遠いが、改善しつつある、とみている<sup>39)</sup>。ここに名前のあがっているロジャーズ&サンズ社は、万国博開催を記念して年号の1851の刃を備えたナイフを作成したり、また実際に80枚の様々な用途の刃を装着したスポーツマン用「万能」ナイフを万国博会場に展示して、その「珍奇」さから多めに衆目を集めた。しかし委員らの活動により万国博の主旨が徐々に理解されていき、シェフィールド地方委員会は市の商工業者に向けて、つぎのような声明を出している(日付はないが、前後の事情から6月のことと推測される)。

当市の鉄・鋼・銀製品の生産は数世紀にわたり、国内のみならず国際的にも比類ない名声を保ってきた。来たる博覧会はわれわれの産業の強さの秘訣を再認識する機会であり、またわれわれに欠けている点を発見し将来的にそれを克服するきっかけとなる機会でもあろう。博覧会の組織にあたる関係者は技巧的 (artistic) 洗練度を重視しているようなので、そのための鍛練の時間はある。われわれは基本的に当市からの出品が新奇性ではなく実用性を重んじること、もし高価で新奇な物を出品すれば、博覧会の目的にはそぐわないことを注意しておきたい。博覧会の目的は、当市の産業が日常の生産活動によりどのような物を産しているか、その総体を(多様な品種と等級をすべて網羅するかたちで)展示することによりまっとうされる。先般来訪した王立委員会の二人の委員の要望として、原料から精緻な最終製品の完成まで、おのおのの製造工程が観客にわかるような展示をということであった。各業者はこのことに留意されたい<sup>40)</sup>。

8月には、シェフィールド市民と地方委員会の活動もきわめて活発で、寄附も1000ポンド、市と刃物業者がそれぞれ50ポンドずつ醸出しているとロイドは報告している<sup>41)</sup>。

---

39) WC/III/87.

40) WC/VI/6.

41) WC/IV/107.

最後に、主要各都市の万国博寄附金の総額を一覧表であげておこう。出典は万国博の翌1852年4月24日に提出された王立委員会第一次報告書の添付資料である<sup>42)</sup>。表で対象としたのは人口三万人以上の主要都市であるが、このなかには行政法人格をもった都市や選挙区となっている都市以外の町も含まれている。三万人という基準は、これまで見てきた諸都市のほとんどがこの規模で網羅されるということで筆者が任意に設定しており、それ以外の意味はない。最初に首都圏、次にそれ以外の都市をアルファベット順に並べている。人口は直近のセンサスの情報が引用されているので、ほぼ万国博当時の実勢を示すものといえよう。それぞれの都市について寄附金総額と一人当たりの額を、いずれもポンド単位で示した。寄附金の醸出にあたっては、熱意や万国博実施による利益の「還元」以外にさまざまな思惑や事情が影響しているのも、これらの額が結果的にそれぞれの都市の万国博に対する温度差を忠実に示すものとはまでは言えないが、ある種のバロメーターと見ることはできよう。大ロンドンの中心であるシティーとウェストミンスター、とくにシティーが総額でも一人当たり額でも際立って多く、万国博のお膝元であるロンドンが早くからきわめて熱心な態度を示していたことを物語っている。また地方都市で一人当たり金額が0.01ポンド(=6ペンス)を超えているのは、マンチェスターやブラックバーン、ボルトンといったランカシャーの工業都市、羊毛産業の中心であったブラッドフォード、ハリファックス、ハダスフィールドといったヨークシャーの諸都市であることがわかる。

表 主要都市の万博寄附金額

都市名	人口	寄附金総額 (£)	一人当たり金額 (£)
(首都圏)			
City	127,869	26,732	0.209
Chelsea	56,538	200	0.004
Finsbury	323,772	313	0.001
Greenwich	105,784	276	0.003
Kensington	44,053	357	0.008
Marylebone	370,957	1,258	0.003
Southwark	172,863	458	0.003
Tower Hamlets	510,727	315	0.001
Westminster	241,611	7,681	0.032
Woolwich	32,367	283	0.009
(首都圏以外)			
Aberdeen	71,973	312	0.004
Bath	54,248	200	0.004
Belfast	99,660	581	0.006

42) "First Report of the Commission for the Exhibition of 1851," appendix no.XL, *Official Catalogue*, vol.IV.

Birmingham	232,841	897	0.004
Blackburn	46,536	820	0.018
Bolton (Lancs.)	61,171	726	0.012
Bradford (Yorks.)	103,778	1,605	0.015
Brighton	69,673	183	0.003
Bristol	137,328	788	0.006
Bury (Lancs.)	31,262	84	0.003
Cheltenham	35,062	165	0.005
Cork	86,485	50	0.001
Coventry	37,711	112	0.003
Cricklade	35,719	0	0
Derby	40,609	342	0.008
Devonport	38,180	85	0.002
Dublin	254,850	406	0.002
Dudley	37,962	259	0.007
Dundee	78,829	202	0.003
Edinburgh	66,734	909	0.014
Exeter	40,688	90	0.002
Glasgow	333,657	2,667	0.008
Greenock	39,391	130	0.003
Halifax	33,582	730	0.022
Huddersfield	30,880	917	0.03
Hull	84,690	281	0.003
Ipswich	32,914	340	0.01
Jersey	57,020	250	0.004
Leeds	172,270	2,030	0.012
Leicester	60,584	199	0.003
Limerick	63,073	0	0
Liverpool	376,063	758	0.002
Macclesfield	39,048	150	0.004
Manchester	303,382	4,548	0.015
Merthyr Tydvil	63,080	207	0.003
Newcastle-upon-Tyne	87,784	522	0.006
Norwich	68,195	431	0.006
Nottingham	57,407	200	0.003
Oldham	52,820	90	0.002
Paisley	47,951	147	0.003
Plymouth	52,221	144	0.003
Portsmouth	73,827	401	0.005
Preston	69,493	303	0.004
Sheffield	135,310	845	0.006
Southampton	35,305	423	0.012



Stockport	53,835	420	0.008
Stoke	84,027	0	0
Stroud	36,535	93	0.003
Sunderland	63,855	205	0.003
Swansea	31,461	156	0.005
Wigan	31,941	243	0.008
Wolverhampton	119,748	271	0.003
Yarmouth, Gt.	30,879	55	0.002
York	36,303	103	0.003

出所：本文脚注参照

## 5. おわりに

ロンドン万国博の実施方針をめぐり国内の業者の意見が大きく分かれた問題として、ひとつは「表彰問題」、すなわち優れた展示品にたいして等級分けしたメダルおよび賞金を授与するかどうかという問題があり、もうひとつは「バーミンガム問題」、すなわちすべての展示品にその製造(業)者の名前を表示することを義務づけるか、という点でも議論の応酬があった。これらについてはそれぞれすでに別稿で扱ったので<sup>43)</sup>、本稿ではそれ以外の諸面での産業界や各地域の反応とそれへの主催者側の対応に焦点をあててみた。すでに何度か指摘されているように、産業革命の担い手であった基軸産業の中心地や、国際的比較優位を確立し万国博が象徴する自由貿易による交易の促進によってますます利益を得る産業は前向きな好意的態度を示すことが多かった。一方、農業部門を中心とする保護主義的・保守的気風の強い業界は概して消極的であった。

しかし万国博の理念や主旨がよく理解されていなかった段階では前者のような地域でも当惑気味の雰囲気が強かったし、このように単純に二つのカテゴリーに分けてしまうことも適切とはいえない。たとえば積極派の典型的事例としてマンチェスター市があげられるが、同市の場合もトーリー主義者や保護派は慎重ないし消極的な態度を示し、その点では他の都市と共通していた。また、この市の場合、産業的「比較優位」を獲得した立場からの猜疑心もみられたことを指摘しておきたい。すなわち万国博はマンチェスター(あるいは北部工業都市)よりもロンドンに商業的利益のみをもたらす催しではないかという疑念もあった<sup>44)</sup>。また同市の手織業者のなかには、大量生産の普及品がフランス製の装飾的奢侈品と直接比較されることに戸惑いがあったことも事実である<sup>45)</sup>。この戸惑いは、ロンドン万国博の理念

43) 重富(2003; 2005)。

44) Auerbach(1999), pp.77-78.

45) Davis(1999), p.71.

そのものに関わる重要な問題でもあったことは、さきの別稿で指摘したとおりである。いずれにしても1850年の1月以降の王立委員会による合意形成活動は、大はこのような理念に関わる問題から、小はささいな局地的・突発的事情による障害まで、多くの困難に遭遇しながら開催のわずか半年前まで続けられることになった。初の国際的規模の博覧会を開催するにあたり、避けて通れない産みの苦しみのプロセスであったのかも知れない。

本稿では時間的制約により、各地域や産業界の反応について十分に解明できなかった面も少なくない。うち、剽窃 (piracy) の危惧は多くの製造業者をして慎重な態度をとらせた懸念事項であった。いずれ稿をあらためて検討したい。

#### 参考文献

##### 《マニュスクリプト》

Minutes of the Meetings of the Commissioners appointed by Her Majesty for the Promotion of the Exhibition of the Works of Industry of All Nations, to be holden in the year 1851. (Jan.11<sup>th</sup>, 1850 ~, 王立委員会資料番号 8A/I)

Correspondence and Papers, Royal Commission for the Exhibition of 1851. (脚注ではCPと略記し, そのあとに資料番号を付する)

Windsor Collection, Royal Commission for the Exhibition of 1851. (脚注ではWCと略記し, そのあとに資料番号を付する)

##### 《公式カタログ》

*Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851*, 3vols. (1851), London: Spicer Brothers.

*Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851*, 4vols. (1996), 本の友社。引用箇所ではOfficial Catalogueと略記した。

##### 《二次文献》

Auerbach, J.A. (1999), *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display*, New Heaven.

Davis, J. (1999), *The Great Exhibition*, Stroud.

Leapman, L. (2001), *The World for a Shilling: How the Great Exhibition of 1851 Shaped a Nation*, London.

Greenhalgh, P. (1988), *Ephemeral Vistas: A History of the Expositions Universelles, Great Exhibitions and World's Fairs, 1851-1939*, Manchester.

Kusamitsu, T. (1980), "Great Exhibitions before 1851," *History Workshop Journal*, issue 9, pp.70-89.

Hobhouse, H. (2002), *The Crystal Palace and the Great Exhibition: A History of the Royal Commission for the Exhibition of 1851*, London.

大野誠 (2009) 「民間団体と議会：工芸振興協会の18世紀半ばの活動から」大野誠編著『近代イギリスと公共圏』, 昭和堂, 105-130頁。

重富公生 (2003) 「1851年ロンドン万国博と製造業利害—『バーミンガム問題』を中心に—」『神戸大学経済学研究年報』第50号, 1-14頁。

——— (2005) 「1851年ロンドン万国博の表彰問題をめぐって」『国民経済雑誌』第191巻第4号, 69-83頁。

## Summary

PLANNING THE GREAT EXHIBITION OF 1851 AND THE RESPONSE OF REGIONAL AREAS

KIMIO SHIGETOMI

The Great Exhibition of 1851, held in London, was the first exhibition as an international event. Its scale was enormous, with nearly 100,000 items being exhibited. Preparing the event was, therefore, a long and formidable process, completed after repeated trial and error. This paper investigates this process of preparation, especially the activities of the Royal Commissioners for the Exhibition of 1851. In this process the cooperation of regional manufacturers, merchants, and influential persons who would afterward be exhibitors, contributors, or supporters for the Exhibition, was inevitable. Initially many of them were indifferent, suspicious or, in some cases, opposed to holding such an event, largely because they had not understood the concept and purpose of the international exhibition. Some members of the Royal Commissioner frequently visited cities and rural areas all over the country, explaining to the inhabitants what the Exhibition would be. In every principal city and district Local Committees were organized in order to promote regional cooperation and subscription. In spite of these efforts, indifference and suspicion lingered until well before the Exhibition.